

産地となり得たのは、東京市場に近い事、気候条件により品質が悪い(酸味が多く皮が厚い)点を逆に利用して貯蔵ミカン中心にする事、農協の指導で共同選果場の建設など市場対策に積極的である事 etc あげられるが、不利な自然条件を克服しようとする前向きな姿勢が見られる。

農家構造の実態は刈野部落を選んで調査したが、水田農業と柑橘農業の相違点が都市化の影響を受けた地域でどのように影響するかをもっと深く研究したかったが勉強不足と知識不足から充分考察できなかったのは残念である。

六日町盆地の地形と土地利用

— 四扇状地の比較 —

林 原 陽 子

論文の構成は次のごとくである。

第1章 調査地域自然地理的概説

第2章 扇状地の地形

- § 1. 四扇状地の地形及び水文
- § 2. 地形分類
- § 3. 地形的構造に関する考察

第3章 土地利用

- § 1. 人文地理的概説
- § 2. 土地利用の変遷
- § 3. 土地利用の現況
- § 4. 農業水利及び農地開発
- § 5. 四扇状地における土地利用の差異に関する考察
- § 6. 四扇状地における農業経営

第4章 土地利用から見た六日町盆地の地域性とその要因

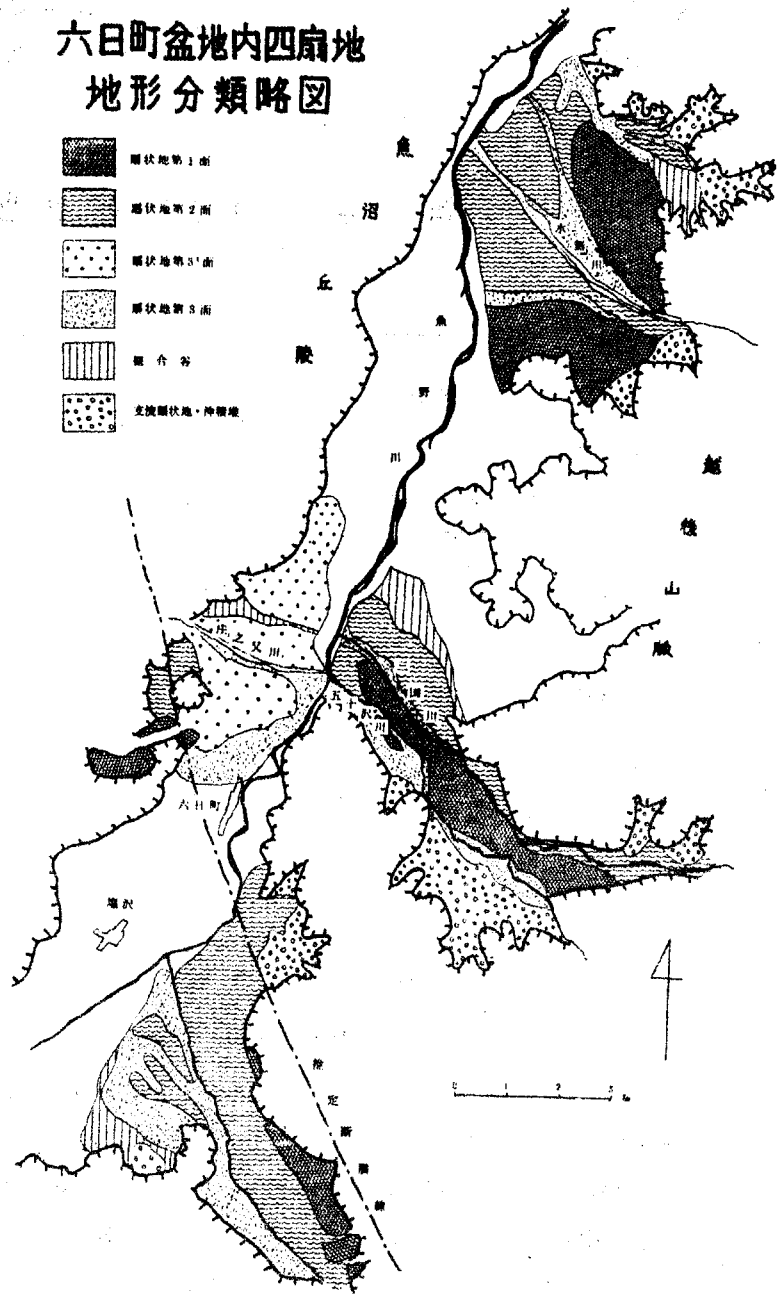
調査地域は新潟県と群馬県との県境近く、東を越後山脈、西を魚沼丘陵に挟まれた地向斜谷であり、盆地の中央を谷川岳に源を發した魚野川が北流し、魚沼丘陵を横谷でうがって信濃川に合流している。東西山地からの支流は盆地床に多数の扇状地を形成したが、それらは背後の山地の地形を反映して、西側の拗曲崖下のものは急傾斜で面積は狭いが整形のものが多く、東側のものは緩傾斜

で面積も大きく屈曲した山麓線の為に偏形となっている。このうち大きい扇状地4つ(水無川・三国川・登川・庄之又川)を取り上げて比較を行った。

地形分類は比高などの形態的分類と表層物質の差を合わせて行った。特に第I面は苗場山起源と思われる黒色火山灰性土のっている面であるが、この面の分布状況から盆地の地形的構造を考察し、断層を想定した。

土地利用状況を見ると現在は水無川fanを除いてはほとんどが水田化されているが、その変遷を見ると扇状地毎にかなりの差がある。登川fanの全部と三国川fanの扇央以外の部分は早くから開田されていたのであるが、その他では大部分が戦前まで桑園としての開発が行われただけであった。水無川fanに至っては荒地のままの部分も多かった。戦後国営開拓が行われ、水無川上流に頭

六日町盆地内四扇地 地形分類略図



首工が建設されて一部の開田も行われたが、まだ大部分は畑地のままで、今後魚野川の水を揚水して開田される予定である。庄之又川 fan は魚野川の水を上流で揚水する国営幹線水路が造られて初めて全面が開田された。

このように土地利用の変遷は各扇状地毎に異っているのであるが、その原因を開発の歴史と自然条件から考察した。その結果早くから開田されたところは近世の新田開発によるものであり、その第1の条件としては、傾斜よりもむしろ水量が豊富であることが必要であったと思われる。扇面に対して水量の少ない庄之又川や水無川 fan では、戦後国営という大規模な資本と技術によって初めて水田としての開発が行われ得たのである。

しかし、各扇状地とも水田へと指向している点では共通している。それは、ここが日本でも有数の豪雪地帯であって冬期の土地利用が不可能な事、地形的には扇状地といっても、扇状地特有の農業上の不利な条件が少ない事、水量は各扇状地で差はあるものの、豪雪地帯である為絶対水量は多い事、市場・労働力・収入の点などで水稲より有利な作物は考えられない事などによる。結局、様々な地域的条件から、日本農業全体から見るとむしろ逆行しているとも言える水田単作に依存し、今後もこの傾向が続いていくと思われる。

(P58よりつづく)

午後は附近の地形面を追跡し、又家の背後に防風林の並ぶ整然とした計画的新田集落を見、高林と言ひ集落の機能を調査した。

7日は雨の中を扇端部の地形面の対比を行なった。扇端部は、昔からの水田地帯であるが、泉があり水が豊富でポンプ小屋もない。又乳牛の飼育も行なわれている。ここでは水田酪農として田植え、収穫期に於ける労働の競合や飼料の問題があると思われる。

8日は再び大田原附近の地形面の追跡を行ない、午前に解散した。

今回の巡検では、地形面の追跡と農家の聞き込み調査の練習を行なったが、短い期間であったが土壌と水との関係、水取得の難易、水田作及び畑作と酪農との関係その他によって那須盆地はかなり明瞭に農業地域区分ができるのではないかと推測された。(4学年 橋本)